

# 井上圓了と妖怪学の現在

高橋直美

*takahashi naomi*

## 一、はじめに——現代の妖怪

鈴木光司氏の『リング』の主人公・貞子の母親のモデルであり悲劇の千里眼の女・御舟千鶴子を中心とした明治四十三〜四十四年の千里眼騒動の昔より荒俣宏氏の『帝都物語』のベストセラー化、「動物占い」（陰陽道を基にした占い）、阿部晴明や陰陽道の流行や、四国の狗神憑きを描いた板東真砂子氏の『狗神』、憑き物や妖怪等をテーマにしたミステリーや怪奇小説など、そして、怨念や怨霊そして闇の世界いわゆる「魔」（＝異界）に関する出版物が書店にずらりと並んでいる。また、TVや雑誌等でも怪奇現象、すなわち、心霊写真・心霊スポット・呪い等の事件を扱うことよって若者層の心をつかんでいる。

このような現象は若者だけでなく、幼児や児童の間にも広まっている。約三十年程前から人気の漫画「ゲゲゲの鬼太郎」をはじめ、最近では「学校の怪談」や「トイレの花子さん」等、学校に関する子ども向けの怪談がTV化・映画化され、人気をかくしている。

社会現象としては、ひと昔前に「口裂け女」という若い女の化け物が出没するとして世間を騒然とさせたことがあげられる。うわさの内容は、マスクをした女が若い女性や子供に、「私きれい？」といって、マスクをはず

し、耳まで裂けた真つ赤な口を見せて追いかけてくるというものである。ただ、従来の妖怪と違うのは、彼女は真正正銘の人間であり、口が裂けたのは美容整形手術の失敗によるもの、どこまでも素早く追いかけられるのはフェアレディに乗っているからで、護符がわりに「ポマード」というと逃げていく等、現実的な理屈で固められたいかにも現代の若い女性らしい様子の、化け物である。

この「口裂け女」は全国津々浦々、人気のない暗い夜道に出没するとされ、若い女性や子供の恐怖の対象であったが、一般的妖怪である座敷童や河童のような神秘さはなく、どちらかというと痴漢や人さらいの類に近いイメージである。

もつとも、最近では渋谷に新しい化け物が出るという話が流行している。ある女性がピアスの穴から間違つて視神経を抜いてしまった。そのため、渋谷辺に出現しては「ピアスしてますか？」と若い女性に声を掛け、もし「はい」と答えたら相手の耳をかみ切ってしまうという内容である。ピアスの穴から神経が抜けるというのは美容整形で失敗して口が裂けてしまったということと同類であるし、自分の災難で人を襲うという理由も同じである。

しかも、この二つの例はどちらも、(どこそこ辺りの道というだけ決まった場所があり)道で突然話しかけられて襲われるというパターンである。これは誘拐犯や通り魔といった女性や子供にとつての犯罪者の形をとっていると思われる。それとは逆に、昔の怪談は、村の外れの人けのない道で狐狸に騙された類の話が多かった。また、墓場等「死」と密接な関係にある場所が怪談の宝庫でもあった。渋谷の怪談とは反対の、どちらも人けのない、寂しい場所が怪談の舞台であり、町中の雑踏には怪談というのは存在しなかったのである。

科学万能の現代にあつては、妖怪は現代風にイメージチェンジをはかり、人間同様、都会の住人として生存権

を得たのである。

しかしその一方で、「鬼」・「魔」といういつの世にも存在する心に巣くう悪も現代社会に大きな影を落としている。それらは常に人心に潜み、活動の機会を虎視眈々と狙っている。犯罪者がよく「魔が差した」というが如くである。

また、オウム真理教等、神秘主義的なカルト集団への若者の参加、神戸猟奇殺人の酒鬼薔薇少年やドイツのポケモン殺人事件に見られる、人が死ぬところをみたいという猟奇的な欲望等、異常心理による凶悪事件の続出もその系類にあたるだろう。

この種の事件は、いわば現代的危機意識からの逃避であるとも言われているが、その神をも恐れぬ不屈きな行いは、神仏や悪霊の崇りを恐れて自己を改める古の人々の意識と隔絶したものであると言わざるを得ない。古来より、人は神仏による罰を恐れた。これはどこで何をしようと、その行為にはすべて自己責任を取らざる得ない、すなわち、どんなに注意深く見つからないように悪いことをしても、結局は自分がそのことを一番良く知っているのだから逃げることはできないという真理である。仏教では同姓同名天という二人の仏の使いが人の両肩に乗っており、常に天に行つてはその人の行いを報告するとされている。しかし、科学万能の今日においては、神仏も魔も妖怪も作り話として皆本気にしない。近代西洋哲学の基本は「我思う、ゆえにわれあり」、すなわち、近代的自我、西洋個人主義が物事の根本思想だからである。日本国憲法においても個人の権利を強調しているが、義務はおぎなりである。自らが快く納得できることが自分の世界であり、自分の理解できる範囲でしか物事を判断しようとはしない。しかも宗教の否定・道徳の欠如から不可視の存在を信ずるのは無知とする考え方が広まっていった。要するに、現代の魔は人の奢りから生まれたと言える。

確かに、現代は仏教をはじめ、既成の宗教が形骸化してしまい、衰退の一途を辿っている。しかも、戦後の復興は高度経済成長とともに、受験戦争等の競争社会を形成し、より良い人生を送るためには人を押し退けて出世しなければならなくなった。相手を蹴落とすことが自己の幸福に繋がる弱肉強食の世界に他ならないのである。

機械化文明は人間をもモノ化してしまい、いにしえ人が人知の及ばぬ大自然に対して抱いていた素直な畏敬の念をすっかり奪ってしまったのである。

ところが、世の中には、実際にはなみなならぬ優れた能力や実績があるにも関わらず、巧く人生を送れない人もいる。いわゆる「運」の悪い人である。幸運や不運という不可思議なもののために、世の中理屈道理には行かないことがある。よく使う言葉であるが「万が一」の心配が人生には常に付きまとう。

特に勝負の世界では常に「運」を呼ぶためにマスケットや守り札を身に付けたりして人知を超えたものに、幸運を運んでくれることを期待する。勝負の世界では特にその傾向が強い。また、野球などのスポーツでも予想だにできないことが起こり得るため、ピンチの時でさえ「まさかの逆転満塁ホームラン」への期待が常に膨らむのである。選手はその可能性を求めて「げん」をかつぎ、各球団はマスケットをつくって守護を願ひ、勝利を期す。

子供の他愛のない遊びである籤やジャンケンなども、勝率の計算は可能であるが、勝負の予想は難しい。そこで、ジャンケンで何を出したらいいのかを決めるのに、両手を逆交差させて覗き穴をつくり、そこを覗いてだすケンの種類を決める等、非現実的であるがいろいろな予測方法を考え、吉事を占うのである。

一般にも、交通安全のお守りや合格祈願の絵馬等を買って求めて守護を願う人が多い。また、普段は神仏など見向きもしない不信心者でさえ、肉親が生死を彷徨っているときや事業が倒産しそうな切羽詰まった状況に陥る

と、決まって神仏の加護を仰ごうとする。

このように、今日の科学技術の進歩や合理主義・論理主義的な思考傾向を考慮しても、人間は「闇の世界」に対するある種の畏怖・恐怖を抑えることがなかなか難しいといえる。

一例として夜道の不安を考えてみたい。奈良時代に比べると確かに現代は情報が溢れ、しかも、社会的に安全であるため、暗い夜道の一人歩きもそれほど危険ではなくなっている。しかし、人家も無いような山道で、夜、迷子になってしまったらどうであろうか。車という安全な囲いに乗っていれば熊に襲われるなど直接的な危険は避けられるであろうが、心因的な恐怖「不安」を払拭することは難しい。

もともと、山で暮らしている人と都会の真ん中で暮らしている人とは当然感じ方が違うだろう。人それぞれの資質という点も考慮すべきであるが、それぞれの帰属集団の規則や習慣・状況が情報の受け取り方を大きく左右することもある。

キリスト教文化圏では十三という数字を忌み、日本では四シ（死）、九ク（苦）を忌む。キリスト教の場合はイエスの処刑との関連、日本の場合、死、苦という語呂合わせである。特に、日本の場合、『古事記』の昔から死は「黄泉」「闇」の世界のものであり、不浄・禁忌のものとされていた。

しかし、一方では人はその「闇」の部分に畏怖の念を抱きながらも、いつの世でも怖いもの見たさという欲求から、「闇の世界」に接近を図るのである。

## 二、怨霊や呪詛——日本の闇の伝統

日本の歴史は、谷川健一氏が『魔の系譜』で述べているように、「魔」（死霊や怨霊）が支配する歴史でもあつ

た。女王・卑弥呼は巫女であり、呪術や卜占によって国を治めていた。また、大和朝廷の成立以降は権力闘争の犠牲となり、非業の死を遂げた皇族や貴族の怨霊を祀り上げることと呪いを封じようとし、そこから御霊信仰が誕生した。また、それにより鬼や悪霊が発生し、呪禁や陰陽道、密教等の怨霊・呪術文化が生み出されるのである。

例えば、政権闘争に巻き込まれ非業の最期を遂げた草壁皇子、舍人皇子、志貴皇子等に天皇号を追号し、御陵を移動して魂静めや祀り上げを行ったり、菅原道真の怨霊（鬼気御霊）の北野天満宮への「祀り上げ」（神格化）がその良い例である。宇治の橋姫にみられるような呪い（呪詛）と、その呪詛を引き受けてくれる祈願所としての神社（鞍馬の貴船神社等）の隆盛。病気を治すため朝廷の陰陽寮の役人であった陰陽師による、呪詛・調伏が「魔」の系譜としてあげられる。

しかも、仏教の興隆に伴い、空海が中国で伝授された真言密教は祈禱・調伏のオーソリテイとして隆盛を極めていく。

このように、祈禱・呪詛・調伏が盛んになるにつけ、調伏相手である妖怪・悪霊と、呪術師の線り出す使い魔である式神や護法童子の類が大挙して登場してくる。東京国立博物館所蔵の泰山府君祭を行う阿倍晴明の絵には祭壇を取り囲んで異形の姿をした式神が数匹描かれている。そして平安時代の名作『栄華物語』に、「神の怪は陰陽師、物の怪は験者（密教系の修験者のこと）」と記されているごとく、朝廷に渦巻く権力闘争を背景にした闇の産物、権謀術策の奥の手として呪術が重要な地位を占め、発達していくのである。

その中でも、特に真言密教は『御伽草紙』のひとつ「弘法大師の御本地」に描かれているように強力な調伏法を登場させ、広まっていく。説教『さんせう太夫』や『曾我物語』には「不動明王法」等の調伏法が述べられ、

当時の状況を物語っている。

呪詛・調伏は平安時代のみに限ったものではなく、武田信玄・上杉謙信等の戦国武将も信州・飯綱山（修験道の山）の飯綱権現を信仰し、狗神と同類の飯綱の法を習得しようとしたと言われているほどである。

しかも、明治維新の戊辰戦争の際（慶応四年九月頃）にも「東征軍勝利北方降伏護摩祈禱」「戊辰業障消滅の事」と称する調伏を寺社仏閣に行わせている記録がある。

今日でも密教系寺院の護摩焚きや高知県香美郡物部村の「いざなぎ流」の太夫（祈禱師）による呪詛は有名であるが、その他にも、いわゆる「拝み屋」といわれる占い師・呪術家も健在であるし、エクソシストと呼ばれるキリスト教の悪魔祓いは映画になったほど人気が高い。

また、例年問題となる戦没者の慰霊や靖国神社の祭祀は、古来よりの御霊信仰がその基となっているため、単に政治的な課題ではなく、むしろ民族の情念の問題なのである。次元は異なるが、水子供養等というものも同様で、日本人の「死霊」に対する信仰の深さ・思いの深さを示していると言えよう。

一方、呪詛を行うものや、御霊信仰の本体そのものの例としては、

「吾ふかき罪におこなわれ、愁鬱浅からず。すみやかにこの功力をもって、かの科をを救わんとおもう莫大な行業を、しかしながら三悪逆になげこみ、その力をもって、日本の大魔縁となり、皇を取って民となし、民を皇となさん」

と呪い、自らの舌先を噛み千切って、流れるその血潮で大乗経の奥に呪詛の誓文を書き付けて海に沈めた崇徳上皇の怨念や、

「夜に入り陰雨交々として来る。雷電激して閃光気味悪し、遠く近く雷鳴続く、鬼哭啾々たり 村兄は読経

をす 余は 寺内、石本等不臣の徒に復讐す可くノロヒの祈りをなす ノロヒなり、ノロヒなり。」

「余は祈りが日々に激しくなるつつある。余の祈りは成仏しない祈りだ。悪鬼になれるように祈つてゐるのだ。優秀無敵なる悪鬼になるべく祈つてゐるのだ。必ず志をつらぬいて見せる。余の所信は一分も一理もまげないぞ。」

という二・二六事件の磯部浅一の獄中手記の記述が有名であろう。

このように、許すべからざる怨敵を討つことも叶わず、その存在自体が認められずに生きながらすでにこの世から抹殺され、眼前に死が迫っている、神仏にさえ見捨てられた人間に出来ることはただ一つ、悪鬼や怨霊となつて怨敵に復讐することだけである。このように救いの全くない窮状における怨念は、ニーチェのルサンチマンやクレマツチーのヒステリー性等神経症と比較できないほどすさまじい。

その一方で、人々はそれら復讐の呪詛から回避する方法を考えた。その結果、怨霊を神に格上げして魂鎮めを行い、逆に守護を願う「祀り上げ」や「棚上げ」を行いその魔力を封じようとした。北野天満宮（菅原道真）、神田明神（平将門）等は祀り上げの代表的な神社である。しかも、その怨念の強さや魔力の強さがプラス価値の力として発動したからであろうか。不思議なことに、これらの神社は逆に靈験あらたかと評判になった。天神さま・菅原道真是学問の神様として受験生の信仰を集め、反逆者・平将門を祀った神田明神は名岡つ引き・銭形平次で有名となった。

このような呪詛や魔の世界観は、近代国家建設を目指した明治政府さえもその影響下に組み入れていた。

前述の崇徳上皇の怨霊は七百年の時を経て天皇家を恐怖させ、先帝・孝明天皇の遺志を継いだ明治天皇は即位の翌々日、慶応四年八月二十六日（崇徳上皇の命日）、大納言源朝臣通富（副使三条左少将）に崇徳上皇の御神



靈還御の宣命を読み上げさせた。源朝臣通富は上皇の御陵に対して、

「今度大御意乎繼志氏尊靈乎迎閉奉利其御積憤乎和米奉利賜波牟登思食氏皇宮爾最近伎飛鳥井町爾清邪伎新宮」

と述べ、上皇の御神霊をお迎えして上京区今出川堀川東飛鳥井町の白峰神社に祭祀した。しかも、

「速爾多年乃宸憂乎散志御迎人登共爾皇都爾還坐氏天皇朝廷乎常磐爾堅磐爾夜守日守爾幸反給比此頃皇軍爾射向比奉留陸奥出羽乃賊徒乎波爾鎮定米弓天下安穩爾護助賜反登恐美恐美母申賜波久登申」

と述べて、朝廷の安泰とともに、奥州鎮定への力添えまでも祈願している。また、明治六年には淡路の廃帝である淳仁天皇をも合祀し、その呪力を祀り上げ守護神を増強しようとした。

昔話にある鬼から力をもらう（一寸法師が打ち出の小槌で立派な武士になったり、山姥から金太郎が生まれたりした）ことにより、一層強い力を得ることができるといふことと同類なのかも知れない。

さらに、明治三年の「新律綱領」には「凡ソ厭魅ヲ行ナヒ、符書ヲ造リ、呪詛シテ人ヲ殺サント欲スル者ハ、各謀殺ヲ以テ論ス」と記され、明治四十一年施行の刑法には「妄リニ吉凶禍福ヲ説キ、又ハ祈禱符呪等ヲ為シ、人ヲ惑ハシテ利ヲ図ル者」は拘留・科料に処すと定められている。

しかしその一方で、明治政府は祭政一致政策による廃仏毀釈や、神社の系列化により、皇祖神の系列を除く既成宗教に大打撃を与えた。崇徳帝や淳仁帝の祟りはおそれながらも仏教のバチを恐れずに徹底的に迫害を行った。そしてその結果、仏教は廃れ田中智学や島地黙雷、井上圓了ら各宗門の有志によって、明治仏教改革運動が起った。このような混乱は、一方で天理教等の新興宗教を誕生させた。また、政府により統合されなかつた神は異端とされ、「淫祀」という隠れ信仰を余儀なくされることにもなるのである。

### 三、圓了とその時代

井上圓了が妖怪学を提唱した明治という時代は、先祖代々の宗教が政府によって混乱させられた時代でもあり、西洋の近代思想が輸入され、近代科学で物事を解明しようとした科学万能主義の時代であり、その一方では、全知全能の人格神をたてるキリスト教が怒濤の如くになだれ込んできた時代でもあった。全知全能の人格神と自然科学万能主義、西洋の神と日本の神の対立等、矛盾する価値観がりん立し、また価値観を強制することによって宗教や信仰に対する懐疑や不安を生じた時代とも言えるだろう。

その価値観の混迷が「鰯の頭も」的な信仰、或いは迷信や因習の類と科学的な事象による思考的な混乱をより一層広げていったのかもしれない。特に、西洋の近代科学を学んだ人は、理屈よりも情念に重きを置き昔からの生活を続けている集団を「後進的・迷信的」として侮蔑した。今日でも、パソコン等最先端技術を使わない、昔からの生活スタイル・伝統を守っている人に対して、「遅れている」と蔑む人が少なからずいるのと同じである。価値観の混迷した明治期にあつて、民衆の迷妄を解こうとして自説を展開していった学者もいた。その代表が良くも悪くも井上圓了であろう。

井上圓了はなぜ『仏教活論』で執拗にキリスト教の人格神を攻撃したのであろうか。圓了はデカルトの「*ense, donc je suis; cogito, ergo sum*」から始まる西洋哲学及び西洋近代科学を信奉しており、その論理性と近代的な思考法を民衆に広め、各々が自分なりの価値判断が出来るようにしたいと思ひ、そのためには、西洋近代科学と相対するキリスト教神秘主義を喝破しなければならぬと考へたであろう。『仏教活論』では非論理的・非整合的であるとしてキリスト教の人格神を否定し、さらに仏教の西方十萬億土や実在の人物以外のいわゆる弥勒菩薩や阿修羅王等の仏菩薩天人・悪鬼羅刹の存在をも否定している。圓了にとつての宗教はあくまでも理念であ

つて、情緒的神秘的なものではないのである。

ゆえに、『妖怪学講義』において圖了は、次のような図式を示し、



この図表中の直覚的とは、すなわち神秘的の謂にして、これを通俗的神秘論に比するに、高等の情想によるものなり。また、妄信的を感情および神秘の二論に分かちたるは、一つは自らえがくところの妄想像をもつて宗教と信じ、さらにこれを怪しまざるものにして、通俗的感情論という。例えば恐怖の情より種々の妄想を起し、これによりて宗教を組織するがごときこれなり。つぎに通俗的神秘論とは、通俗の奇々怪々なる現象に接し、あるいはこれをその心内に感じて、さらにその道理を説明せんことを求めず、宗教は元來怪奇、神秘のものなりと信じて、奇々怪々の現象をそのままに許容するものをいうなり。

今、この表を予がいわゆる仮怪および真怪に照らして考うるに、妄信のおよび理内的是ともに仮怪に關係し、利害的は真怪に關係せり。しかして、仮怪に關係するものは普通の學術に屬する問題にして、真怪に關係するものはひとり宗教に屬する問題なり。

と述べている。

(第六 宗教学部門)

また、「第一 総論」では、

世に伝うるところの怪談は、ことごとく信拠すべからずとするも、これによりて妖怪全くなしと断言すべからず。予、もとより世間に妖怪の真に現ざるを知る。

と述べ、圓了は真正の妖怪（真怪）とは、

諸学の道理によりて妖怪の原理を考究しきたり、いわゆる超理的妖怪に達すれば、到底人知の測り知るところにあらざして、ただこれを不可思議と云つてやまんのみ。けだしその妖怪は絶対の大（妖）怪にして、その胎内に一切の妖怪を包有し、世間種々雑多の妖怪は、その一分子にもなお足らざるものなり。

(略)

しかしその大妖怪は、「師曠の聡」あるも聴くべからず、「離婁の明」あるもみるべからず、「公輸子の巧」あるもいかんともすべからず、声もなく臭もなく、実に妖怪の精微かつ至大なるものなり。この精微至大の体、ひとたび動きて二象を現す。一つはこれを心と名付け、一つはこれを物と名付け。この二者互いに相交わりて、その間に隠見起滅するものは小妖怪に過ぎず。ゆえに、いわゆる小妖怪は波石相激して白雪を躍らすがごとし。みるもの誤り認めて白雪となすも、真の白雪にあらず。今、世人の一般に妖怪なりと信ずるもの、なおこの白雪のごとし。ゆえに予は、そのいわゆる妖怪は真正の妖怪にあらずして、この妖怪を現出するものひとり真正の妖怪なりという。

のごときものであるという。そして、真怪は信仰に属するもの、すなわち絶対的なものであると説く。圓了が『妖怪学講義』で取り上げた妖怪は狐狸の類、山人の類、怪火の類、占術呪術の類、神仏・地獄極楽の類等で、

一般に我々が想像する一つ目小僧やのつぺらぼう等は姿をみせない。いかにも、宗教や因習と関係のあるものばかりが圓了の妖怪学の対象となっている。しかも、真怪は神仏と同格であり、真理であるという。

しかし、圓了が真怪を宗教にまで引き上げたのに反して、現代では、圓了の時代では考えられなかった科学の進歩を呈してさえているのに、オカルトや超自然現象的なものの流行は止まるところを知らないような勢いである。

圓了が神聖視した真怪を無視するように、現代人は禁忌の世界に遊び感覚で気軽に介入しようとしている。これは禁忌という魔力に対する物見遊山、好奇心から起こる怖いもの見たさの興味本位で、科学万能という護符を持ちながらのぞき見をしようとしているに過ぎない。圓了が哲学や宗教のレベルで熟考したものを遊びでいじくり回している。これは科学の発達が人間を傲慢にした一例と言えるだろう。

その一方ではまた、圓了が迷信として払拭しようとした神仏への祈願も盛んに行われている。

いくら信仰をもたない人間といえども受験前の合格祈願や、元日の初詣、厄払い等どこも大盛況で人々は人間の力を越えたものに「祈願」することを当然と考える。結婚式も同様で、信仰をしていない人が無縁の筈の寺社仏閣・教会で大安吉日を選び挙式する。葬儀は友引には行わないし火葬場も友引が休みという、因習・慣習が今もなお、社会の中に脈々と生き続けているのである。

(前略)

「違うさ。科学というのは普遍的であるべきだ。同じ条件の下で実験した結果は同じじゃなくちゃいけない。しかし心だ、霊だ。魂だ、神だ仏だってのはそうはいかない。どんなに同じ宗派だろうが、人が別なら脳も別々だ。だから科学で扱える分野ではない。脳の働きひとつ物理的に解明できていないのに、心だの霊だの

が解る訳ないじゃないか。心霊というのは科学では扱えない唯一の分野なのさ。だから、心霊科学というのは言葉として破綻しているじゃないか。」

(略)

「心が科学で扱えないんだとすると、やはりまやかしたというのかい。」

「神経の仕組みは皆同じさ。神経の病を直すのが神経医学だろう。これは痔を直すのと一緒だ。神経は脳に繋がっている。脳の仕組みもまた然りだ。あまり進んではないが、そのうちには痔のように治療できるようになるさ。」

(略)

京極堂はそういうとおかしそうに笑った。

「つまりね、脳や神経といった体の器官を心や魂そのものだと考えるから間違うんだ。かの井上博士なども、ここんところを勘違いして、何でもかんでも神経の所為にしたもんだから、結果的にはあれ程好きだったお化けをみんな否定しなくちゃいけなくなっちゃった。何だか可哀想じゃないか」

井上博士というのは、明治の哲学博士・井上圓了のことらしい。

「しかし神経がいかれてしまつて怪異を見ることは現にあるじゃないか。井上圓了は明治時代の人間にしてはけだし進歩的じゃないか。そんなに悪くいうことはない。」

「別に悪くなんかいつてないだろう。可哀想だといつたんだ。それに君のいう通り脳や神経が心と緊密な関係を持っているのは確かだろう。だからといつて同じものだつてことにはならないさ。」(京極夏彦『姑獲鳥

の夏』講談社ノベルズ)

これは、現代の妖怪作家の第一人者・京極夏彦氏の作品の一部であり、この妖怪シリーズの主人公である陰陽道の拝み屋・京極堂の持論である。彼は「この世には、不思議なことなど何も無いのだよ」という決め台詞で、人間の心の闇の部分に妖怪になぞらえて解きあかしていく。

同じく現代の妖怪研究者・多田克己氏は『百鬼解説』（講談社ノベルズ）で、

妖怪は必ずしも無知な人が生み出す誤解でも、迷信でもない。そこにはただ恐ろしいというだけではなく、未知な物や現象に対する人間のあこがれや畏敬、好奇心といったものがある。これが崇敬の対象となれば神々の一員ともなり、好奇心の対象となれば、これを究明しようとする新しい科学の発見の機縁ともなつてゆくであろう。

明治時代からの近代化の運動のなか、妖怪の存在を信じることは前近代的迷信であり、西洋自然科学の立場からこれを喝破されなければならないとされたが、本来は妖（それまでの見識では理解できないもの）を探究することこそが、科学の発展をもうながしてきたのであるから、これは順序をアベコベにした倒錯した運動であった。

と述べている。これは取りも直さず井上圓了のことを指して非難しているであろうことは容易に想像できる。圓了が『仏教活論』や『妖怪学講義』において喝破したのはキリスト教の人格神や「真怪」以外のものであり、圓了のいう真怪は非常に難解なものであり、その上學問上のレベルではなく宗教のレベルのものである。

また、多田氏は妖怪の科学的な解明の成功例として、寺田寅彦の「ジャン」の研究を紹介している。このジャンという怪音を土佐沖大地震の発生と関係付けて、半世紀後に展開される「プレートテクトニクス」論の先駆けともいうべき推論を行ったと述べている。

その一方で、圓了に関しては「簀（蓑）火」の項で、『不思議弁妄』の「琵琶湖の簀火」についての記述を踏まえ、

井上圓了博士はここで、「蓑火」の正体はガス体で、火ではないと説明し、物理現象として迷信の打開を試みている。だが、なぜ発光するのか？ 不燃性のガスは発光することがあるのか？ 反対にガスが燃えているとしても、なぜ他の物に着火しないのか？ そもそもなぜ簀にだけとりつくのか？ などなど科学的な考察はまったく欠落しているため、ますます簀火は怪しいものとなっている。

と述べている。

このように妖怪研究者・多田氏は、圓了の妖怪研究は本人の意図と全く反して、妖怪を（圓了自身が信じている真怪さえも）否定しながら、しかも、科学的解明どころか不思議をより増長させてしまっていると指摘する。

確かに、先程の「蓑火」論を読む限りでは、圓了の妖怪研究は非科学的だと思われる。しかし、それは我々の時代の科学が進歩し、しかも我々自身が高度の教育を受けているから理解できるのであって、明治の無学の人間が聞いたならば、それこそびっくりするような科学的な解明であつたかもしれないのである。圓了自身は哲学者・教育者であつて科学者ではないので詳細な説明はかえつて人々を困惑させるかも知れないと考えたかもしれないし、彼にとつての究極の妖怪は真怪であり、仮怪は真怪を解きあかすために否定されなければならないというだけのものだった。

圓了は教育者として仮怪のいわれなき恐怖から人々を救い出すことを使命としていた。しかも、寺田寅彦のような最新科学の権威ではないし研究者でもない。今の学問レベルで考えること自体が当時の庶民事情を見えなくする。



当時日本と比較できないほど科学が進歩していた欧米において、次のような事件があったことを考えると、時代的な背景から一概に圓了を責めるわけにはいかないだろう。

一八四八年四月、ニューヨーク州アカデア市のフォックス家の姉妹が霊の声を聞き、交信したという話が広がり、姉妹を囲んでの降霊会が盛んに行われた。その後、降霊術はアメリカ全土に広がり、ついにはヨーロッパにまで伝播した。

（妖怪学講義 心理学部門）

そのため一時的に欧米各地で降霊会が盛んになり、贗の霊媒師が続出して犯罪が生まれ、社会問題となった。そのため姉妹は自ら降霊術が偽物であることを暴露し、混乱を收拾しようとした。（もつとも、この降霊術（テールターニング或いはテールトローキング）が船乗りによって日本に伝わり、後年「コックリ（狐狗狸）」として流行することになる。）

また、明治三十年〜四十年代にかけて催眠術が流行し、「眠れる予言者・エドガー・ケーシー」がもてはやされたりした。

欧米のこのような状況を鑑みても、一般民衆の知的レベルでは寺田の話は難しすぎて理解できないと思われる。反対に、譬え話ではないが、難解な内容ではない圓了の妖怪談義は理解しやすく、一種の精神的な安定作用にはなったのではないだろうか。周囲が闇に囲まれていた時代、価値観が不安定な人々は得体の知れない恐怖に襲われていたわけであるから、その証明がどうであれ正体が理解できればそれはそれでよかったのではないだろうか。イルミネーション輝き、暗闇が消滅した現代でさえ夜道の一人歩きは心細いことから、昔の人の抱いた恐怖心はおして知るべしである。恐怖や無知による生活の乱れ、社会の混乱をまねかないよう合理的な思考の重要性を圓了は感じ、使命と受けとったのではないだろうか。

また一方では、祭政一致により、特に村落などに祀られている（国家神道系列に属さない）いわゆる「若宮さま」のような、ある特定の集団にのみ関係する怨霊や疫病神を祀った社に対する信仰が「淫祀」となっていた。若宮の多くは、村人に災禍をもたらした悪霊を祀り上げ、封印したものである。政府の政策でこのような異端神の祭祀（淫祀）を禁じられれば、祀り上げの封印はとかれ、再び災禍がもたらされるのではないかと人々は危惧する。国家の体制の変化と因習の狭間で人々はやはり苦悩していたのである。

このように、西洋科学の普及のみならず生活に密着した禁忌を払拭するためにも、圓了流に言えば、仮怪を追放して真怪を顕現させ、真の宗教を示して現実生活を充実させることが重要だった。そのためにあえて圓了は妖怪学を講演し、人心の安定を図ったのである。圓了は科学的で正確な論拠を求め、アカデミックな論旨を教えることよりも、あまり科学的な知識のない人（迷信にとらわれているような人）でもすぐに分かるような簡単な理屈を巧く利用したのではないかと思われるふしがある。圓了の対告衆は彼曰く「愚民」であつたのだから。

多田氏のいう「不思議が科学を進歩させる」という意見には賛成であるが、圓了の仕事は科学の究明よりも、百鬼夜行の恐怖を取り除くことに主眼が置かれ、圓了は真怪の究明とともに民衆の仮怪に対する恐怖を除くという二つの方向性を持っていたことを考慮しなければならない。

前述の京極堂の「この世には、不思議なことなど何も無いのだよ」という台詞を圓了流に言い換えれば、「仮怪には不思議なことは一つもない。ゆえに人々よ恐怖することなど何も無いのだ。真怪の本性は真の宗教と同類であつて怪現象ではないのだから。」となるだろう。

妖怪が科学の進歩を促すという要因は、不思議（なぜだろう）という感情を伴う興味からである。しかし、プラスの意味である興味とは正反対のマイナスの意味である「恐怖」は人々を閉鎖的にする。圓了はその閉鎖的な

ものを除き、広い視野がもてるよう、すなわち色々な知識を広く吸収できるような人々の考え方を開放しようとしたのではないだろうか。しかし、そのために無用な妖怪はすべて否定しなければならず京極堂のいうように圓了は、大好きな妖怪をも否定した「可哀想な人」になってしまったのである。

圓了自身、因習や怪談を打破する一方で、和田山の哲学堂にわざわざ駒込から取り寄せた幽霊の出るという梅の木を植えさせたり、駿台白狐の書を所持したり、天狗の筆跡を寄贈してもらったり等、自身の生活そのものに妖怪をはべらせていた。

圓了は妖怪を愛するという点においては、全く逆の見地から妖怪研究を行つた柳田国男に勝るとも劣らないだろう。しかし、柳田は民俗学的見地から妖怪の発生とその変遷や分布を主に研究し、妖怪（圓了のいう妖怪）の存在意義を好意的に人間社会に取り入れている。科学で妖怪の現象を解明し無知から来る不安や恐怖を除こうとしてその存在までを否定してしまつた圓了と、民俗学でその発生と変遷を辿つた柳田は、結局のところ、西洋近代合理主義と日本のある種の精神主義という観点の相違なのであろうか。人は死してその肉体は腐敗・分解されて土にかえるが（圓了の見地）、その墓地に人魂や幽霊が出ると言われる根拠は何か（柳田の見地）というところではないだろうか。もつとも、圓了には柳田が幼時期に経験した神隠しのな神秘体験（原体験）がないのだから神秘に対する感受性が違うのだろうし、浄土真宗の寺に生まれた圓了にはかえって神秘体験など嫌悪すべきものであつたかも知れない。

ところで、圓了の哲学者・教育者として活動を見てみると、修身教会運動の一貫である全国巡回講演会の演題内容は、「詔勅・修身」が四〇・七％、「妖怪・迷信」が二三・七％、「哲学・宗教」が一五・二％（田中菊次郎「圓了と民衆」『井上圓了研究』）となつており、「詔勅・修身」「妖怪・迷信」の多いことが分かる。この二つをどう結

び付けるかが問題となるが、圓了の最大の目標は、やはり人心の安定にあつたのだと考察すれば、国家の安泰は人民の安心がなければ成立し得ないし、また邪見に捕らわれていては修身はできない。要するに圓了の愛国教育の理念をここに見ることができるのである。

しかし、圓了の「可哀想」なところは、妖怪と妖怪学とを宗教哲学と信仰との関係の如く、存在という問題で対峙せざるを得なくしてしまったことである。本来であれば妖怪の論破が真怪の証明となるはずだったが、真怪は仏教で説くところの真如の如きであつて、妖怪の本質的なもの、法理の如きものとなり、個々の妖怪の存在が無くなつてしまつたのである。

#### 四、おわりに

精神の崩壊が危惧され、IT革命等の最先端技術が社会を仕切り、神と機械とが同居し、価値観が混乱している今日、日本人の精神の危機的状況は、明治の人々が感じたそれと質的な違いこそあれ、各方面での先行き不安の部分があることは否めない。

巷では古いや呪術、怪奇ものが流行り、精神の歪みから生じる凶悪犯罪が多発し、カルト集団の発生が時代を象徴している。

しかも科学万能と言われるこの時代にも、人々の心に巣喰う妖怪は形を変えて、歴然と存在している。近年、大規模な開発によって社会と隔絶された「異界」は無くなっていった。そのために、狐の嫁入りや狸囃子、河童など山野に住む妖怪はいなくなつたが一方では、魔の化身である悪鬼、いわゆる、殺人鬼や悪魔主義の類が多数登場してきた。

そして、昔は山道や墓場等人けのない暗い場所に出没した幽霊は、現在、その住処を病院や学校という閉鎖された特殊空間、死に隣接した場へと移動せざるを得なくなったのである。

また、霊魂や幽霊が心霊写真等により存在を与えられているのに対し、妖怪は人間の奇形（口裂け女等）へと変化して生存せざるを得なくなった。

妖怪学の祖・井上圓了は妖怪を否定したのではなく、妖怪への恐怖心を取り除こうとしただけであつた。しかし結果として、圓了の妖怪排斥運動と近代化推進運動とが二人三脚の形をとり妖怪撲滅の先駆者となつて、結果的には妖怪の息の根を止めてしまうのである。

妖怪とは河童に見られるように、ある種のアミニズム的な要素を含んでいる。日本の八百万の神のそれに近い。古代人の自然を畏怖し、自然とともに生きてきた生活を否定することはできない。今日のように、情報や機械によつて動かされている生活を考へてみると、今の生活こそが本末転倒ではないかと思う。恐怖や畏敬の念のない社会からは「傲慢」という悪鬼しか生まれぬ。

今日、圓了の時代とは全く異なる「闇」、すなわち、核兵器やダイオキシシン等が人々に恐怖を与えている。これは更なる科学の進歩のみで果して解決できる問題だろうか。

昨今のオカルトブームやナチュラリストなどのいわゆる自然への回帰は、決して別個の存在ではない。機械化が進むにつれ、失つた人間の心というものが求められるようになった。今流行の「いやし系」がそれにあたるかもしれない。文明社会に疲れ自然を求める人々、例えば森林浴、ハイキングをする人は後を絶たない。親の恩ではないが離れてはじめて実感できるのかも知れない。その自然を求める心が人間にある限り妖怪は常に人間ともにある。妖怪とは一種の自然の生み出した蛭子でもあるのだから。

【参考文献】

- 『井上円了選集』第四、十六～十八卷（東洋大学 一九九九年他）  
『井上円了の教育理念』（東洋大学 平成十一年改訂版）  
『魔の系譜』（谷川健一 一九八四年 講談社学術文庫）  
『妖怪学新考』（小松和彦 二〇〇〇年 小学館ライブラリー）  
『日本の呪い』（小松和彦 一九九五年 光文社 知恵の森文庫）  
『日本妖怪異聞録』（小松和彦 一九九五年 小学館ライブラリー）  
『姑獲鳥の夏』（京極夏彦 一九九四年 講談社ノベルス）  
『百鬼読解』（多田克己 一九九九年 講談社ノベルス）